

保育士・教員養成課程における楽典指導
～「音楽Ⅰ」・「音楽Ⅱ」のピアノ表現を深めるために～

矢 内 淑 子
酒 井 国 作
藤 田 桂 子
夏 目 佳 子
鷺 見 千鶴子
久 野 明 子

愛知東邦大学

保育士・教員養成課程における楽典指導 ～「音楽Ⅰ」・「音楽Ⅱ」のピアノ表現を深めるために～

矢内 淑子¹⁾
酒井 国作²⁾
藤田 桂子³⁾
夏目 佳子³⁾
鷺見 千鶴子²⁾
久野 明子²⁾

目次

- 1 はじめに
- 2 問題の背景
- 3 「音楽Ⅰ」・「音楽Ⅱ」における授業目的と概要
- 4 調査方法と内容
- 5 結果と考察
- 6 総合考察と今後の課題

1. はじめに

本学の教育学部子ども発達学科に入学した学生は、将来小学校・幼稚園教諭あるいは保育士を目指す。教員や保育士の採用試験には、地域差はあるが公立も私立もピアノ演奏やピアノ弾き歌いの試験のほかに、教科として音楽科の試験が課されることが多い。音楽科の試験内容のうち「音楽一般」あるいは楽譜の読み方に関する部分は一般に「楽典」と呼ばれる。従来この分野は、本学では「音楽Ⅰ」・「音楽Ⅱ」におけるピアノの個人レッスンの中でピアノ技術の習得に合わせて指導してきた。しかし、近年本学に入学してくる学生はピアノ未経験者が多く、少しピアノの経験があったとしても、楽典に対する理解度の差が顕著であり、その後の音楽関係授業や実習に支障をきたすことがある。そこで、本研究では、2017年度に新しい試みとして、授業時間内にクラス授業として指導する時間を設けて実施し、今後の音楽基礎としての「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」の授業における楽典指導のあり方について検討した。

¹⁾ 愛知東邦大学教育学部

²⁾ 愛知東邦大学非常勤講師

³⁾ 愛知江南短期大学子ども健康学科

2. 問題の背景

本学で開講されている音楽に関係する授業には、教育・保育の内容・方法に関する科目として、2年次前期に「保育内容（音楽表現）」、3年次前期に「音楽科教育法」、また教科教育技能に関する科目として、1年次前期に「音楽Ⅰ」・1年次後期に「音楽Ⅱ」、2年次後期に「音楽表現技術」、3年次後期に「音楽Ⅲ」と「総合表現技術」（一部）がある。1年次に履修する「音楽Ⅰ」・「音楽Ⅱ」の科目では、具体的に教育・保育内容や方法を習得するための前提となる音楽に関する基礎能力を習得することが求められる。

2年次以降の音楽関係科目に必要な音楽の基礎知識は、中学校の教科書に書いてある内容程度である。しかしながら、本学の学生は、音楽の専門家を養成するものではないため、入学時における音楽的経験及び技術は、一般の学生と変わりはない。中学では、高校受験に直接関係のない実技科目はあまり重視されていないのが現状で、なおかつ高校では芸術は選択制であるため、音楽選択をしなければ、高校3年間に音楽を学習することはない。仮に音楽を選択したとしても、高校時代の音楽経験は必ずしも十分なものとは言えない。例えば本学の高等部：東邦高等学校では芸術は高校1年次に選択で2単位あるだけである[1]。本年度入学した学生を対象にアンケートを行ったところ、有効回答数62人に対して、高校で音楽を選択していた者は37名であった。2名の学生が高校1年次のみ授業があったと但し書きをしており、一般的な高校では芸術は1年次にしか履修していないようである。

このような環境で入学した学生の何割かは、入学当初は五線譜が読めず、ピアノ学習の教材であるバイエルの楽譜の意味すら分からない状態であり、このような初心者を含め音楽的な基礎能力に差がある集団に対してどのように指導すべきか、ということは保育士・教員養成校で大きな問題になっている[2][3]。要因の一つとして、年々ピアノ初心者が多くなっていることも挙げられる。また、本学は男子学生が多い。因みに今年度は、初心者の割合は84%で男子学生の割合は41%であった。しかし、彼らに対して適切な音楽の基礎教育を施し、読譜能力を高め、音楽の構造や特徴について考える機会を与えることは、ピアノの技術の向上はもとより、学生に対して、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定子ども園教育・保育要領にある領域表現のねらいを達成し、将来保育者として子どもの音楽的活動体験を授けるための前提として必要な音楽に対する興味の惹起を促すことが期待できる[4][5]。さらに、「楽典の知識が保育を想定した音楽表現の文脈と切り離されているところに問題の本質がある[6]」に対する問題解決の糸口となる。これらをもとに、「音楽Ⅰ」・「音楽Ⅱ」において楽典の授業を実施することにした。楽典の知識が音楽と有機的に結びつき、有効に働くように検討をする必要がある。

3. 「音楽Ⅰ」・「音楽Ⅱ」における授業目的と概要

音楽学習におけるピアノ演奏は、音楽を感得する方法として有効な手段であり、単に作品の音楽性を習得するだけでなく、子どもに音楽を指導する際に必要となる音楽的な指針・方法を与えてくれる。そこで、「音楽Ⅰ」・「音楽Ⅱ」では、楽典も取り入れながら、子どものための音楽活

動を支える基礎技能として、保育の際、弾き歌いや子どものリズム表現に対応できるピアノ技術を学習している。教材について賛否はあるが、本学は、公立保育士試験課題になっているバイエル教則本を使用し、初心者には教則本の終了程度を目標とし、経験者はさらに様々な音楽作品を通して豊かな表現方法についても学習し、音楽性を高めるように指導している。しかし、初心者においては、読譜の点で困難を感じている学生が多いのが現状であり、1クラス8人前後で行う楽典指導は十分な成果を得るに至っていない。

そこで、今年度は、「音楽Ⅰ」の楽典授業においては、「バイエルの楽譜を読むことができる基礎知識を習得」し、「音楽Ⅱ」の授業においては「バイエルの楽譜に表されている基本的な音楽的内容を理解してピアノ表現に生かす」ことを目標とした。このように「楽典の授業」においては、「バイエルの楽譜」に特化し、そこに付随する内容として、関連する様々な音楽表現についての基礎知識・技術を指導するようにし、その学習を通してより効率的なピアノ学習に寄与することを心掛けた。ここに掲げた具体的目標は、教育・保育現場において、子どもの歌の弾き歌いや子どもの発達段階に適した楽曲を選曲、さらには子どもの実情に合わせて移調を含む簡単な編曲など、具体的な「教育・保育の内容の方法」の習得に繋がる重要なスキルとなる。

4. 調査方法と内容

(1) 授業の内容

具体的には、以下に挙げるような内容をピアノの技術指導とは別に実施した。

楽典の授業の中で毎回課題プリントを配布して、内容説明を行った。宿題として、その日の学んだ内容の理解を確認する課題プリントを課した。次週の授業に添削した課題を返却し、正解とともに注意する箇所について説明した。

<音楽Ⅰ>

- ① 五線・譜表・音符など楽譜を読むために必要な基本的な記号の理解
- ② 音楽の3要素（メロディ・リズム・ハーモニー）の認識とそれを表す方法の理解
- ③ 音名や階名の理解
- ④ 音程についての理解
- ⑤ 長音階の概念と基本的な長音階・調号の理解
- ⑥ やや特殊な記譜法（連符や装飾音符など）と基本的な楽語の理解

<音楽Ⅱ>

- ① 三和音と七の和音の構造の理解
- ② 和声の基礎（和音の連結・カデンツ）の理解
- ③ 短音階の概念と基本的な短音階・調号の理解
- ④ 移調と転調・近親調の理解
- ⑤ コードネームの理解
- ⑥ 簡単な音楽の形式・構造の理解

(2) 調査内容と評価

アンケート調査を5段階評価で行った * 主な結果については図表にて表示

(3) 調査対象

「音楽Ⅰ」、「音楽Ⅱ」の受講者(人数は各データを参照)

(4) 調査時期

入学2か月後、入学4か月後:「音楽Ⅰ」の試験時、入学9か月後:「音楽Ⅱ」の試験時の3回行った。

5. 結果と考察

本研究では、「楽典」の指導の成果として「ピアノ学習への楽典の貢献度」「学生の音楽的興味・意欲について」「楽典の基礎知識の定着度」の3つの観点から結果と検討を行った。

(1) ピアノ学習への楽典の貢献度

本年度入学した学生に関して、何回かに分けてアンケートを実施して、楽典の授業のピアノの学習への貢献度について意識調査をした。

「楽典の授業がピアノの授業に役立っていると思うかどうか」については意見が割れているが、入学2か月後、入学4か月後では、高校芸術で音楽選択者の方がわずかながら役立っていると考えer者が多かったようである。9か月後には高校芸術で音楽非選択者がわずかながら役立っていると考えer者も増えてきた。楽典の基礎事項が実際の「音楽」と結びつくまでにはある程度理解を深める必要がある。この点が差異となって表れたと考えられる。同様の傾向は「楽典の授業で学習した内容はピアノの試験曲の練習に役立ったか」という質問の回答にも見られた。楽典の授業がピアノの授業に役立っていると思うか」の問いについての入学9か月後のデータを見ると、これらの関係は「音楽Ⅱ」になると逆転していることが分かる。芸術音楽非選択者には少し遅れて効果が表れたと考えられる [図表1]。

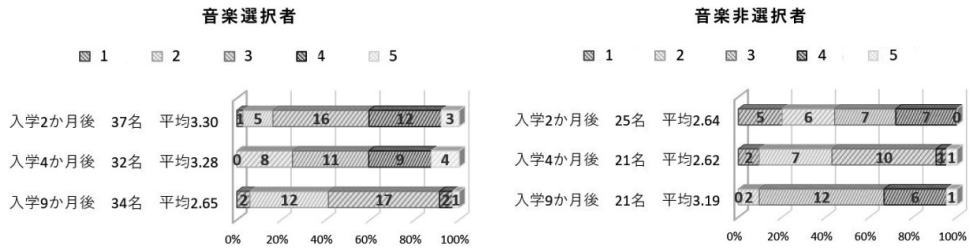
[図表 1]

学生アンケート (2017年度音楽Ⅰ・Ⅱ受講生対象)

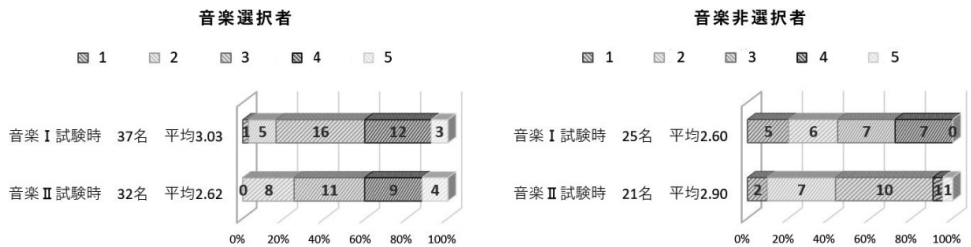
(5段階評価で「①=思わない ②=あまり思わない ③=どちらでもない ④=少しそう思う ⑤=そう思う」で回答)

グラフ上の数字は人数を表す。

Q : 楽典の授業がピアノの授業に役立っていると思うか



Q : 楽典の授業で学習した内容はピアノの試験曲の練習に役立ったか



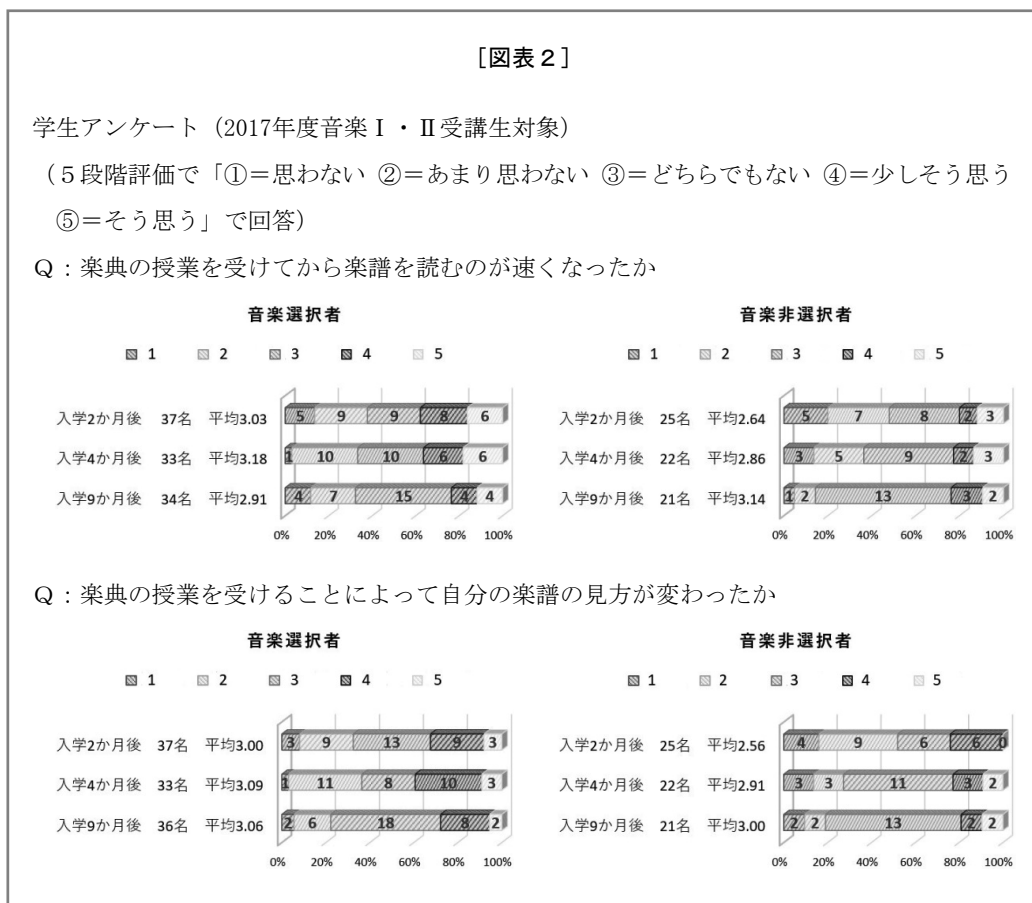
一方、授業での手ごたえとして、中間的なレベルの学生に対しては、概ね意図したとおりに楽典の指導は役立っていたように思われるが、ピアノの指導は個人の技術レベルに合わせた個別指導であるため、楽典の授業内容よりもピアノの方が進んでしまっていて、ピアノ学習に対してあまり楽典の内容が役立てられなかった例や、逆に楽典の方が先に進んでいたために、学習者が楽典とピアノ実習が相互に関連のあるスキルであることを体感できていないのではないかとされる事例も見られた。この傾向は「音楽Ⅱ」の方が「音楽Ⅰ」より顕著であった。

(2) 学生の音楽的興味・意欲について

楽典の知識を習得するにしたがって、音楽に向き合う姿勢に変化が起きたかどうかについて調べた。まず、楽譜については、「楽典の授業を受けてから楽譜を読むのが速くなったか」という設問では、音楽Ⅰの内容ではまだまだあまり目立った効果は表れていないようであった。しかしながら入学後2か月の時点よりも4か月後の方が「速くなったと思う」学生が増えたことから一定の成果は上がっているようである。また「楽典の授業を受けることによって、自分の楽譜の見方が変わったか」については、入学後4か月の時点での高校芸術音楽非選択者の変化が大きかった。これは、日常音楽に親しんでいても、楽譜に対して向き合う機会が少なかったで

あろう音楽非選択者の方が楽譜に対する意識の変化が大きく表れたのではないかと考えられる。

[図表 2]



一方で音楽IIの終了時に同様の質問をしたアンケートでは、平均値が似たような値になってきており、高校芸術音楽選択者と非選択者にはほとんど差異は認められなくなってきている。

(3) 楽典の知識の定着度

実際に具体的に楽典指導をした内容が学生に定着しているかどうかについて、期末試験の結果をもとに、次の3点について検討した。

i) ヘ音記号の楽譜が読めるか

バイエルでヘ音記号が初めて登場するのは54番である。これはピアノ実習進捗度でいえば前期(音楽I)の中頃に設定されているが、現場で指導をしていると十分に理解できていない学生も少なくない。

音楽IIの試験ではヘ音譜表で音階を書かせる問題を出题し、学生自身が読めるようになったかという意識と共に正答率を調べた [図表 3]。

「音階を書く」という別の要素もあるものの、学生の意識と試験の結果には明らかに正

の相関が見られた。しかしながら正答率から考えると、学生は音楽Ⅱの終了時にヘ音譜表の楽譜が十分読めるとは言い難く、学生がピアノ実技において相変わらず読譜に苦労しているであろうという様子が伺える。これは、多くの音楽教材はト音譜表から学習するプログラムになっており、また日常目にする楽譜の多くがト音譜表であることから、新たにヘ音譜表に習熟するためには別の努力が必要となり、その反復練習や知識の定着への作業が依然として不十分であることを示していると考えられる。

[図表 3]

試験問題による解析

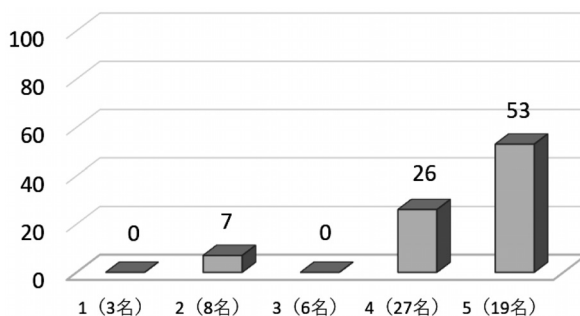
音楽Ⅱ試験問題例：ヘ音譜表に必要な調号と臨時記号を用いて次の音階を書きなさい。

(1) ト長調 (2) ハ短調 (和声的短音階)

意識調査：楽典の学習を通して、ヘ音譜表の音符が読めるようになったと思うか？

(5段階評価で「①=思わない ②=あまり思わない ③=どちらでもない ④=少しそう思う ⑤=そう思う」で回答)

各回答者の人数と上記問題例の正答率 (%)



ii) 調号が理解できているか

バイエルでは調性に関する内容は不十分で、ハ長調以外の調が学習者に認識されるのは70番以降であるが、調の組織を理解することは将来「子どもの歌」のさまざまな楽譜を読むうえでも不可欠である。これについても学生自身がどう思っているかという意識と共に「音楽Ⅱ」での試験の正答率を調べた (図表 4)。

[図表 4]

試験問題による解析

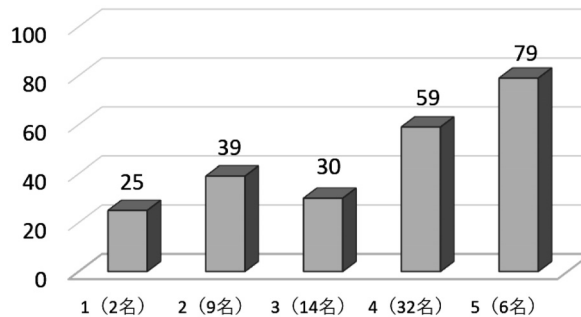
音楽Ⅱ試験問題例：与えられた譜表に必要な調号と臨時記号を用いて次の音階を書きなさい。

(1) ニ長調 (2) イ長調 (3) ホ短調 (和声的短音階) (4) ト短調 (旋律的短音階)

意識調査：楽典の学習を通して、さまざまな調の調号が理解できるようになったと思うか？

(5段階評価で「①=思わない ②=あまり思わない ③=どちらでもない ④=少しそう思う ⑤=そう思う」で回答)

各回答者の人数と上記問題例の正答率 (%)



<参考：音楽Ⅰ試験の音階の問題の正答率>

第1問 (ト音譜表のもの) = 22%、第2問 (ヘ音譜表のもの) = 15%

(ただし問題の条件は音楽Ⅱと同一ではないので単純な比較はできない。)

同様に学生の意識と試験の結果には明らかに正の相関が見られた。また問題条件の設定が同じではないので単純な比較は難しいが、音楽Ⅰの終了時と比べて明らかに理解度が高まっている。授業や提出課題において音階を繰り返し書くことを実施したため、理解が高まったと考えられる。

iii) 階名が読めるか

階名の理解はいわゆる「移動ド」と呼ばれるソルフェージュ能力に直結するが、ピアノではむしろ「音名」としてド・レ・ミを扱う傾向があり、移動ドの階名による読譜はピアノ実習では教授しにくい。一方歌唱指導の際には非常に重要なスキルとなる。これも同様に学生自身の意識と共に試験の正答率を調べた (図表 5)。

同様に学生の意識と試験の結果との間には正の相関が見られた。また問題条件の設定が同じではないので単純な比較は難しいが、音楽Ⅰの終了時と比べて明らかに理解度が高まっている。

【図表 5】

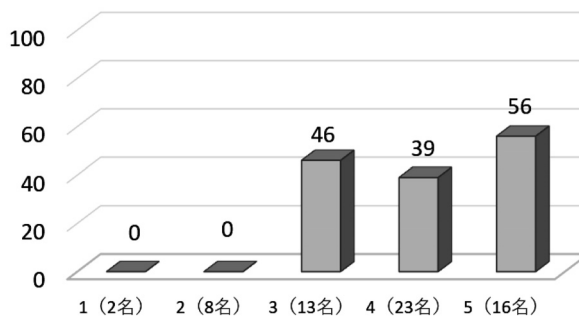
試験問題による解析

音楽Ⅱ試験問題例：次の楽譜を階名で読みなさい。



意識調査：楽典の学習を通して、さまざまな調の楽譜を階名で読めるようになったと思うか？
(5段階評価で「①=思わない ②=あまり思わない ③=どちらでもない ④=少しそう思う ⑤=そう思う」で回答)

各回答者の人数と上記問題例の正答率(%)



<参考：音楽Ⅰ試験の階名の問題の正答率>

23% (ただし問題の条件は音楽Ⅱと同一ではないので単純な比較はできない。)

従来は楽典の試験を実施していないので、単純な比較は難しいが、特に音楽を学問として意識していない日常的な社会においては、「ド・レ・ミ…」は音の絶対的な高さを表す「固定ド唱法」として認知されている傾向が強く、「移動ド唱法」は、意識的に取り込まなければ習得できない場合が多い。例えば、Kodalyのメソッド[7]などで幼児期から音楽教育を受けていた場合は別であるが、一般的な音楽の教科書には移動ド唱法で階名について記述してあるにもかかわらず[8]、授業で指導する前の学生を見る限り移動ド唱法はほとんど定着していないように感じられた。しかしながら、音階を繰り返し書かせ、階名が長音階や短音階を構成するよりどころであることを粘り強く指導し続けた結果、図表5のように理解度が高まるという成果が得られたと考えられる。

(4) まとめ

以上のことから、本研究による楽典指導は、一定の効果があったと考えられる。特に階名については、ピアノ指導ではスケールの指の訓練としての位置づけが大きくなる傾向があるが、学生が音楽的な音組織を理解する道具として役立てられるように教授できたと考える。この知

識をもとに、改めてバイエルのさまざまな調の楽譜を分析することにより、一層楽曲の理解を深め、さらにそれがより豊かな音楽表現につながることを期待できる。

一方、より確実な知識の定着には、演習の繰り返しと学習者の能動的な姿勢が必要である。学習者が能動的に学ぼうとすることができる教材レベルと、現実に必要なスキルを習得するために考えられる教材のレベルをどう合わせていくかが、より効率よく指導し成果を上げるための課題となろう。

6. 総合考察と今後の課題

2017年度は、「音楽Ⅰ」の楽典授業においては、「バイエルの楽譜を読むことができる基礎知識を習得」し、「音楽Ⅱ」の授業においては「バイエルの楽譜に表されている基本的な音楽の内容を理解してピアノ表現に生かす」ことを目標とした。このように「楽典の授業」においては、「バイエルの楽譜」に特化し、そこに付随する内容として、関連する様々な音楽表現についての基礎知識・技術を指導するようにし、その学習を通してより効率的なピアノ学習に寄与することを心掛けた。

その結果、「音楽Ⅰ」・「音楽Ⅱ」の授業における楽典教育は次のような成果を得ることができたといえる。

- ① ピアノ学習の前提として必要な読譜の基礎知識の理解を助けた
- ② 学生の音楽的な興味・意欲をある程度引き出した
- ③ 音楽表現をする上での前提となる楽譜の理解を促した

しかし、学生のピアノ技術・音楽への興味・音楽経験の差異などの個別のレベルへの対応はまだ不十分であると考えられる。

音楽表現を言語による感情表現に例えるのであれば、言語における文法の習得が音楽における楽典の理解に相当する。言語による豊かな感情表現を実現するためには、文法の理解と多くの語彙の習得が不可欠であるように、音楽表現を豊かにするためには、楽典の習得とより多くの音楽体験が必要となる。

集団授業であるという制約はあるものの、本研究の結果を踏まえ、今後さらに効率的で魅力的、実用的な指導を研究・実践していきたい。

教材としては、バイエル以外のピアノメソッドからバイエルに欠けている音楽的要素を取り入れられたり、流行歌曲など、現代の学生が興味を引く音楽の中に素材を求める（楽典の内容が基礎的であるがゆえに利用できる素材が限られるのが難点であるが）など、より楽譜や音楽を学生に身近に感じてもらい、必要な音楽スキルの習得に役立てるようにしたい。

<参考文献>

- [1] 東邦高等学校ホームページ <http://www.toho-h.ed.jp/education/general>
- [2] 河原田潤 (2015)「保育士・幼稚園教諭養成系における『音楽理論』の必要性と授業展開についての一考察」常葉大学短期大学部紀要46号, pp.129-138.

- [3] 高御堂愛子 (2010) 「保育者養成における音楽教育の今日的課題を探る—東海学園大学人文学部 発達教育学科第一期生の実態調査より」東海学園大学研究紀要文学・健康科学研究編 (15), pp.189-207.
- [4] 前田菜月 (2017) 「音楽学習教材における一考察～音楽学習者のための楽典の教材に着目して～」目白大学高等教育研究 (23), pp.97-103.
- [5] 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定子ども園教育・保育要領<平成29年告示>, チャイルド本社
- [6] 横山真理 (2017) 「主体的な学びを促す「保育の表現技術」科目系列の音楽授業改善の要点—「楽典」に関する授業実践の省察を通して—」東海学院大学研究年報2, pp.161-171.
- [7] Zoltan Kodaly 333 Reading Exercises (Boosey & Hawkesほか) など。
- [8] 音楽のおくりもの (中学音楽) 教育出版 文科省検定教科書

[注] 本学の音楽教育を、一つの哲学 (理念) で統一する必要があること、本学の学生の特徴を見据えて考える必要があるため、教員全員で参加して行った。具体的には、今回楽典を授業として取り入れることで、学んだ内容がどのように演奏にいかされるかなど意見交換をする機会を持ちながら共通の認識で指導にあたった。

受理日 平成30年3月30日